

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.100 2025年1月13日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：https://www.keihinkyodougekidan.com/bunkano-nakama/

全公演満席で好評のうちに終了

第98回公演「黒と白のピエタ——種を粉にひいてはならない」は、当初10公演の予定でしたが、各回満席のため、1公演追加しました。すべて満席のお客さんと、好評のうちに終了することができました。出演された方や観劇された方などに感想をいただきました。

公演を終えておもうこと

板垣 けゑて

「黒と白のピエタ ～種を粉にひいてはならない～」
全11公演が終了しました。

観客の声やアンケートを振り返ると、母の届けたかったケーテの人間性や豊かな芸術性が観客の一人ひとりに届いたように思う。その実感と共に、関わってくださった方への感謝の気持ちが私の全身に充満している。私がこの公演でやろうとしたことは、作品の持つ豊かな表現性をさらに深く、広く息を吹き込む作業を、今の京浜協同劇団と共に取り組むことだった。

公演実現に向けて私ができたことの一つは、人集めだった。正直、それくらいしかできないと思っていた。作品や登場人物の魅力を伝え続けた結果、いろいろな方に力を貸していただいた。まずは、企画の思いに賛同してくださった、若杉民さん、杉本孝司さんへの敬意は計り知れない。お二人への思いを少し言葉にさせてもらいたい。

今回の若杉さんは、初演の時よりも何かが違った。私の主観だが、民さんは今までの鎧を壊し、ゼロからケーテのボディースーツを作り上げるような役作りをして大健闘してくださったように私には思える。そして、いつからか役としてのケーテが、自分の母の姿と同化していくように見えた。2幕後半のケーテの言葉は、母が今の人たちに訴えているかのようにも見えて涙があふれた。それは私だけでなく、生前の母を知る何人かの友人からも語られ、私にはとても嬉しかった。ただそれは同時に、ケーテの姿や言葉を深く自分に刻み、自分の身を削る作業だったに違いない(と思う…)。民さんは肉体を通してケーテを生きぬき、何度も何度も死ぬ思いをされた。公演が終わったことでこの苦しみから解放されることを^{ねざら}労りたい思いと、心からの敬意と感謝を申し上げたい。

杉本さんは、脚本の意味性を表現するための言葉を紡ぐ作業を全て担ってくださった。本来は脚本の中にいる母に私が向き合わなければならなかったのに、企画を立ち上げた当時、母に向かっていくには、私にはまだ時間が必要だった。そのことを杉本さんに伝えた



写真撮影©長坂クニヒロ (以下同)





ところ、杉本さんは、母と向き合い続け、再演のために必要な表現をさがし、追求し続けてくださった。感謝の思いでいっぱいだ。

そして、一緒に作品を作り上げてくれた全ての出演者への感謝を伝えたい。今回の出会いは、私の生涯の宝もとなった。頭の中にたくさんの素敵な顔が浮かぶ。人が人を繋ぎ、創造の輪が繋がったことがこの上ない幸せだった。

公演を終えて思うことは、黒と白のピエタという物語は、時代を越えて伝え続けなければいけない「種を粉に挽いてはならない」、という不動のメッセージをもつ作品であり、貧しさや苦しさの中でも変わらない人間の本质を強調した作品だった。この作品を通して、私は母からバトンを託されたのだと思う。このバトンを私がどうするか。目を逸らさずに演劇と、自分と向き合っていくこととする。最後になりますが、公演に携わってくださった全ての方に、心から感謝を申し上げます。

赤い炎

若杉 民

〈私の仕事〉

14年前に演じさせてもらったご縁で、再びケーテ



に出会うことになった。

和田さんへの追悼の想いととも、けゑてさんに心より感謝したい。

演出家から「前回よりケーテの内面に深く食い込めるように演出したいと考えています。」と伝えられた。4月のことだった。

「それは、こういうことだったんだ。」と、思い知る日々が、私を待っていた。

プログラムにも載せた「わたしの稽古ノート」は、稽古場でのダメのみならず、稽古のない日も毎日いつも手離すことができず、何かふと思いつく度に、常に書き込んでいた。生活の中心に演劇があることがプロだという杉本さんの言葉をかりれば、生活や仕事を抱えながら、私はプロであったのかもしれない。ノートをたどると、終わることのないケーテへの旅を、必死



にあがいて模索した日々が、私の中で赤裸々に蘇ってくる。

そして当然のことながら、今回も旅の途中で、道半ばで、千秋楽という日によって道はバッサリと断ち切られた。

〈演出家（杉本さん）〉

間違いなく、公演班全員が、杉本さんに必死にくらいついていった。くらいつかざるをえない演出だった。一言でいえば、深い愛だと思っている。

公演がさしさわりなく成功する近道をとらず、和田さんの追悼公演であり、京浜協同劇団の公演であることに強くこだわり、役者一人ひとりに容赦なく向き合い、あきらめず、あらゆる経験を動員しての渾身の演出は、千秋楽まで全く弛むことがなかった。そのエネルギーと体力は、今思えば、ケーテそのものであったようにさえ思う。（杉本さんを見本にすればよかったのか？）

公演班全員を代表して、杉本さんの深い愛に、心からの敬意と感謝を申し上げたい。そしてその杉本演出のもと、公演班一同が、かけがえのない信頼と絆で強く結ばれたことを、ここに記しておきたい。

〈プロとアマ〉

永遠のテーマなのだろうか。

杉本さんから「プロとは、生活の中心に演劇があること。」というひとつの答えをもらった。覚悟、矜持、そんな言葉も浮かぶ。私達はいつでも、プロになることができる。ただし、生半可ではない。ケーテが、それを教えてくれる。



〈和田庸子さん〉

芝居後半のケーテのセリフが、けろてさんには、和田さんの言葉に聞こえてきたという。

「あなた達を呑み込んだ深淵は、何百万もの人間の命を呑み尽くしてまだたりないと、今なお口を大きくあけたままなの。」

“大きく”とは台本になかった。“大きく”と、口をつけて出た。和田さんと、声をあわせて。

〈赤い炎〉

千秋楽を迎えたら、自分がどんな気持ちになるか、想像がつかなかった。「もう死んでもよい。」そう思えたらどうしよう、家族に怒られる。

でも、大丈夫だった。私は生きている。

カールが「僕にはちゃんと見えるよ。」と言ってくれた、ケーテの赤い炎。これを消さずに歩いていこう、と思った。この炎は、私を支え、私を変え、私を強くするはずだ。

もっともっと強くなって、三たびケーテと出会いたい、そんな想いが、ふと頭をよぎる。



何か縁があるような気がした

渡邊 直佳

京浜協同劇団に入団しました、渡邊直佳です。はじめまして。

突然ですが、私には、人生において大切にしているテーマがあります。私の人生のテーマは「共感」です。人と出会って感情を伝え合い、同じ志を持って一緒に進みたい人をたくさん見つけること。「この人と一緒に、こんなことを叶えたい」、そんな想いが、人生を通して自分の中に増えたらいいなと思っています。

私が京浜協同劇団に入団を決めたのも、共感があったからです。偶然劇団についてお話を聞く機会があり、演劇をやりたい劇団員たちの想いと、存続させたい多く地域の人たちの想いが重なって65年間も続いてきたということ、純粋にすごいなと思いました。今公演、「黒と白のピエタ」は14年ぶりの再演で全公演満席だと聞きました。追加公演まで満席になる劇団なんてないです(笑)。それだけたくさんの人から愛されている劇団なんだと改めて感じました。

稽古も見学させていただき、物語自体にも、役者の皆さんの溢れる感情にも、とても感動しました。追悼





公演でもあるということ、本当にたくさんの方の「共感」が詰まった舞台だと感じます。一つの公演をするためにこんなにたくさんの方が様々な場所から集まっているのだと思うと、その集まる場としての役割を担っている京浜協同劇団はやっぱりすごいなと思いました。稽古も本番も観させていただいて、この劇団のこの舞台に出会えて幸せだと、本気で思いました。

私は今年の10月、新潟から就職のために幸区に来て、人生で初めての一人暮らしをしています。大学でも演劇をしていたので、働いても続けたいと、なんとなく思っていました。そんなときに、たまたま京浜協同劇団に出会って、新しい生活を始めたすぐ近くに、私が心動かされる場所があることを知りました。偶然かもしれないけど、私がここに住んで、このタイミングで劇団に出会い、「黒と白のピエタ」を観劇することができたのは、何か縁があるような気がしました。

そして、劇団の皆さんがしっかり話をしてくれて、聞いてくれて、私に入団を選ばせてくれたこと、笑顔で迎え入れてくださったことが、一番嬉しかったです。

とは言っても、私も同年代0人の中で演劇を続けるのは寂しいしつまらなくなると思います。だから、私がきっかけになって平均年齢を徐々に下げて、再び劇団を盛り上げられたらいいなと思っています。長年の歴史が積み重なった場所で、たくさんの方の想いが紡がれてきた舞台上、私も一緒に演劇がしたいです。一緒にもっと繋ぎ続けていきたいと思っているので、改めて、よろしくお願いいたします。

「黒と白のピエタ」

京浜協同劇団の金字塔

中村 史也

2024年の掉尾^{ちようび}を飾った京浜協同劇団創立65周年

98回公演「黒と白のピエタ」は、盛況の内に幕を下ろしました。本公演に尽力された方々を^{ねぎら}いたと思います。

誰よりもこの公演の成功を喜んでいるのは、突然に人生を絶たれた和田庸子さんであることに違いありません。初演から14年の時を経て、愛娘^{ねぎら}けゑてさんの望みも叶い、ケーテ・コルヴィッツの人物像を再び甦らせ得たことは、本当に稀有なことでした。

見慣れたスペース京浜の舞台が、黒と白の空間に仕立てられ、これまでにない見事な幻想へと誘ってくれました。舞台上の子供を交えた老若男女の斉唱、躍動は、いやが上にも本作への意気込みが^{うかが}窺えました。

この舞台は、ケーテの生涯を近代ドイツの歴史の中に辿りながら、普遍的真理を立ち上がらせています。家族・人間に対する愛情・人が営む社会の継続、生きる上^おに於いて何が大切かを教えてくれます。息子を戦



場に向かわせ、失った悔恨が、ケーテの創作の土台を強化したように、今正にその只中にある‘戦争’に対して拒絶する思いを喚起します。

その創作は、子供の頃から絵を描くことによって、働く者や虐げられている者たちの中で形成され、常に生きることの証として、白と黒の版画の世界に求め続けたことから、独自の領域に昇華したと云うべきでしょう。

舞台では、両親・夫・子供、関わった取り巻く人々との生き様が、息詰まるように展開されますが、その全てがケーテの芸術を形作っていることを東京芸術座杉本孝司氏が、演出しました。手練れた客演を含む多彩な役者が巧みに組み合わせたり、心地よいアンサンブルを醸^{かも}しました。稽古を重ねた入念な芝居が、観る者の心を^{えく}抉ります。とりわけケーテを演じた若杉民さんの筆使いと歌唱には、眼を見張るものがありました。

若くしてケーテを発見し、志真斗美著『ケーテ・

『コルヴェイツの肖像』に出会え、舞台にケーテを甦らそうと志した庸子さんの執念は、凄まじかったろうと想像できます。その思いを実現できたのは、偏に京浜協同劇団と、共に歩む仲間たちの支えがあったからこそで、その大きさ強さに敬意を禁じえません。本公演は、京浜協同劇団の金字塔になりました。

1987年「ジョー・ヒル」で京浜と出会い、「天空130尺の男」以降、繁く通っていますが、「黒と白のピエタ」初演は観ておらず、遅きに失した感のある私にとって京浜は、終生の劇団になりそうです。65年の歩みを「夢を紡ぐ新拠点」「この日 この地で この人々と」と題する本で触れ、親しくなった劇団員、仲間の皆さんと共に続けて行きたいと思います。

舞台に対して真摯であった庸子さんは、世の中の不正や理不尽に対して、鋭い感性と強い理想を持って



ました。法廷傍聴の後、語り合ったことを思い出します。ケーテの描く子供のあの目を見たことがある、と感じ続けていたのは、ちひろ美術館が過ぎっていたからでした。(2024年12月16日 文化の仲間会員)

Photo ギャラリー 写真家志望の若杉民さんの息子さんが黒組のゲネプロに撮影に入りました。写真をいただきましたのでその一部を掲載します

©小林民人



第26回 文化の仲間

定期総会を開催しました

事務局長 山木 健介

2024年9月29日(日)に第26回定期総会をスペース京浜(京浜協同劇団稽古場)で開催しました。

総会の参加者は18名、総会記念企画の渡辺賢二さんの講演は21名の参加でした。

2023年10月15日に絵手紙を描く会を開催し、2024年8月15日には花火納涼会を開催しました。花火納涼会は事前に劇団周辺の家チラシを配布しましたが、劇団の近くに住んでいる方2名がチラシを見て参加してくれました。その他に1名の方から問い合わせがありました。

コロナの影響が残っていて、従来のような活動ができていけませんので会報の発行も2回にとどまりました。

2024年5月11日から行われた第9回川崎郷土・市民劇「百年への贈り物～川崎市誕生ものがたり」では受付等の手伝いをしました。

総会での主な発言は、以下のとおりです。

- ・「古市場寄席」を2023年10月20日と、2024年8月4日に実行委員会形式で開催したが、文化の仲間も「共催」しているので、「共催」と入れたほうが良い。今後も古市場寄席は開催していく。
- ・古市場寄席のチラシは、劇団周辺の家には60枚配布した。
- ・地元川崎の会員を増やしたいと頑張って声かけしている。
- ・会報51号から100号までの合冊本発行の予算については、会員と劇団員に呼びかけたほうが良い。

総会の最後に、役員を選任しました。世話人の佐藤

友吉さんと藤崎秀子さんが退任しました。

役員(敬称略)は以下のとおりです。

世話人 二村 冬子・高橋明義・橋本教善(以上代表)
山木健介・須田セツ子・西川日女子(以上事務局)
川島雅博

会計監査 渡辺そのこ

総会の後に、総会記念企画として渡辺賢二さんに「平和と人権と民主主義を求めて」と題したお話をしていただきました。以下がお話の一部です。

「現在の宮前区に東部62部隊が設置され、ここからアジア戦線への兵士が訓練されアジア各地に派遣された。」「ここではあらゆる謀略兵器が製造された。」「今から80年前にここが主務機関となってアメリカに対する無差別爆弾としての風船爆弾作戦が展開された。9,300発打ち上げられ1,000発くらいが届いたと言われる。」「登戸研究所では細菌兵器を開発していた。」「敗戦時、証拠隠滅命令がだされ、戦後40年間、だれも話さない日々をつくり出した。」

「戦後、平和を求める市民の動きがあり、演劇活動とか文化活動が展開された。」「1959年12月、劇団建設座・川鉄演劇研究会・劇団もぐらの合同によって京浜協同劇団がうまれた。」「川崎に来た人々はいろいろな困難に直面した。しかし市民・民衆はそれを乗り越える努力をし続けてきた歴史があった。市民が主人公の文化都市を求めてきた。」

などとお話をされました。その後、講師を交えて交流会を行い、総会行事を終了しました。



私説・京浜協同劇団の歩み 第4回(最終回)——京浜協同劇団の65年

劇団を築いた故人たち

城谷 護

創立から65年が過ぎた。この間、数えたら14人の先輩や後輩が鬼籍に入っている。この人たちがいなければ劇団を発展させることはできなかった。私は創立時に入団したので、その人たちのことをよく知っている。今、私が書いておかないと記録が残らないと思うので連載最終回の今回はその人たちのことを書いておきたい。(名前は愛称、芸名、本名の順に表記)

「黒さん」 黒沢参吉(黒川律)

座付き作家で、劇団の初期の上演作品は『炬あかり』、『真土村一揆』、『巢ばなれ』などほとんどが「黒さん」の創作。「この日、この地で、この人々と」という劇団のスローガンは黒さんの発案で、今でも私たちの羅針盤になっている。



黒さんは京浜労演(現川崎市民劇場)や川崎文化会議、東日本リアリズム演劇会議の結成を提唱し、実現させた。今でも地方の劇団に行くと黒さんの写真が飾ってあるくらいで、全国の地域劇団にとっては偉大な先生なのだ。

しかし、黒さんは1975年頃から作品を生み出せなくなり、劇団からも少し距離を置くようになった。その時期はとても苦しかったと思う。「演劇はだれにもできる」と言って、「高津演劇教室」や「ほおずきの会」を作ったが、その集団は短命だった。劇団を作るのはたやすいが継続するのは大変なことなのだ。

黒さんはあまり話したがらなかったが、戦争で中国に赴き30人位の「敵兵」を殺したと最後の本「わが演劇遍路」に書いている。その悔いが平和を希求する戯曲に込められたのだろう。

黒さんは1982年、胃がんのため65歳の生涯を閉じた。ほとんど収入のない黒さんを支え続けてきたシツエ夫人は2024年1月に101歳で他界されたが、劇団事務所に飾ってある額の「困難を糧として」は夫人の書である。次男の黒川栄君は藤沢演劇鑑賞会事務局

長として活躍中。

「きよちゃん」 原科清

黒さんと同じ建設座を経て、劇団の創立に参加。味のある渋い演技はまねのできないもので、いつも存在感に満ちていた。寡黙だったが、言うべき時にはきちんと自分の意見を述べ、後輩の私たちにも役者としての心得や演技についてのアドバイスをしてくれた。小道具も得意だった。そういう魅力ある「きよちゃん」だからこそ根倉藤子さんは16歳の年差を超えて結婚したのだろう。



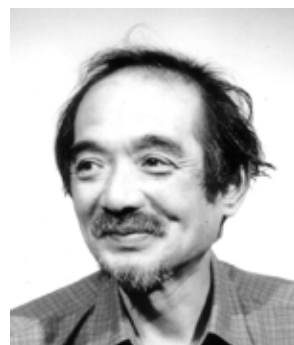
「根倉さん」 根倉藤子(原科トヨ)

歌が好きで、自分で歌詞も曲も作っては披露していた。劇団第3期生。茅ヶ崎にある労働組合の事務所に勤めていて、時々「鰻の押し寿司」を買って来てくれた。面倒見のいい「お姉さん」だった。娘の真生(まお)ちゃんの名前は『真土村一揆』(しんどむらいっき)公演の頃生まれたことから名づけられた。その真生ちゃんも今は60歳前後、古市場に住んでいて元気で頑張っている。



「けんちゃん」 中沢研郎(中澤研郎)

創立メンバー。看板俳優の一人だったが、制作、演出もこなした。まさに劇団の創造的なブレインだった。とにかく夢をいっぱい持った人で、娘を預けていた学童クラブのことをみんなで劇にして上演したことはテレビでも採り上



(8) 京浜協同劇団の歩み——第4回

げられたほどだった。また、総文連20周年の記念事業(1995年)で、合同公演『新加瀬山伝説』を提案し、自ら演出もして成功させた。それらは今も語り草になっている。みんなから「けんちゃん」と呼ばれるように、気さくでみんなに親しまれていた。

東京の労基署で働く公務員だったが、劇団が制作的に大きな飛躍を遂げようと試みた『真土村一揆』公演時に、役所を辞め制作専従として活躍した。

「モラさん」 宮崎昌子(中澤昌子)

出版社に勤めながら、劇団では15年間、主に文芸部、舞台監督として活動した。モラというニックネームは律儀正しいこと＝モラリスト＝から付けられたそうだ。創立メンバーの一人だが、53歳という若さで病死した。



夫、中沢研郎との間に土子(とし)ちゃんという一人娘がいるが、彼女は今、「たま・あさお市民劇場」の事務局長として活躍している。

「やまちゃん」 山口あきお(昭男)

トラックの運転手をしながら25年間劇団活動を続けていた。体も大型だが、気性もダイナミックだった。護柔君と同じ第20期生(1973年入団)。『コーカサスの白墨の輪』、『金冠のイエス』でプロの演出家の小田健也先生に徹底的に鍛え上げられ、役者として大きく成長し、『ある馬の物語』では見事な馬を演じ切った。しかし、残念なことに第2次稽古場ができた翌年にガンで亡くなった。ほんとに惜しい役者を失った。



「ほっさん」 細田寿郎

創立メンバー。日本鋼管川鉄労組の演劇研究会のリーダーとして7年。3集団合同による川崎協同劇団の結成に妻の若菜とき子さんと共に参加。劇団の上演作品の中で演出が一番多いのがほっさんで、20数本になる。鉄鋼労働者として夜勤のある3交代勤務をしながらの劇団活動。並大抵なことではない。

第1次稽古場建設(1970年)の際は、頭金を作るために茅ヶ崎の自宅を売ってまで貢献した。手先が器用で、稽古場の組み立て式のひな壇客席はほっさんの手によるものだ。1階小稽古場の楽屋のカーテン式仕切り板も考案した。



残念なことに2018年に85歳で他界した。それは劇団員の中では最高齢だった。

「水野さん」 水野哲夫

細田と同じく川鉄演劇研究会出身の創立メンバー。

1960年、安保闘争の最中、米大統領秘書のハガチーの来日を阻止しようとしたデモ隊の中にいた水野さんが逮捕されるという事件が勃発した。創立公演『炉あかり』に出演予定で、それは本番初日の18日前。やむなく友好劇団の能村達也さんに代役をお願いしていたが、無罪で公演初日に帰ってきたのだ。その間、室野定子さんは差し入れを持って水野を激励に通い、それが縁で結婚することに発展した。



水野は役者もやったが、制作のベテランだった。また、川崎文化会議、京浜労演(現川崎市民劇場)の役員としても活躍した。

「むろちゃん」 室野定子(水野定子)

建設座から参加した創立メンバー。主役級の配役に恵まれ、その期待に応えた。なかでも『コーカサスの白墨の輪』、『母(おふくろ)』などで小田健也演出に鍛えられ、劇団の演技レベルをぐんと引き上げた。演出も『鉄道員(ぼっぼや)』など数本を手がけた。



水野との間に2人の息子がおり、女優が子どもを育てながらも稽古ができるようにと第1次稽古場建設の時には保育室を設けたが、それも彼女の頑張りによるものだった。(その息子さんたち

も今も演劇活動をしている。)

ただ、晩年は2004年頃から認知症となり介護施設で10余年を過ごした。

「ちょうさん」 佐藤張二 (坂原長二)

第5期生として入ったが、専攻は舞台美術。岡島茂夫さんの指導を受けながら腕を磨き、優れた舞台装置を数多く創った。日本テレビ舞台美術家協会にも加入し、それらの美術誌にも作品が掲載されているほど。『どん底』、『真夏の夜の夢』、『金冠のイエス』、『九〇二番船、進水!』などの舞台は今でも語り草となっている。



岩手出身。愛酒家。夫人の坂原清子さんは「文化の仲間」の仕事を経年長にわたってしてくれた。

「のみさん」 野見山紘一

第20期生。会社の社長をしながらなので忙しくて劇団にはなかなか来れなかったが、たまに役者で出たり、照明を手掛けたりしてくれた。歳は私城谷と同じだが、2018年に77歳で逝ってしまった。無念。



「堤さん」 堤次郎 (鈴木晃)

青森県弘前から出てきて日本鋼管川鉄の養成工に。劇団では第9期生(1964年)。役者も制作もこなしたが、なんといっても特筆すべきは太鼓と制作。太鼓では『権兵衛太鼓』の権兵衛さんを30年もやったかな。フランス、ロシア、韓国などの海外公演でももてもてだった。

今の第2次稽古場建設に当たっては、長年勤めた会社を辞めてまで専従として資金作りに奔走してくれ、建設委員長を私を支えてくれた。晩年、体調を崩して田舎に帰ったが、妹さんに見守られて亡くなったという。劇団近くの「ます



き」という飲み屋でよく飲んだが、今でも私が一緒に飲みたいと思うひとりだ。

「なべちゃん」 渡辺高志

人なつっこく、こんなにも可愛がられる人も少ないだろう。歴史的な街歩きが好きであちこちの街を歩いていた。川崎演劇塾に所属していたが、劇団に移ってきた。同期の劇団員と結婚。「バナナの叩き売り」を得意としていた。特徴のあるキャラクターで舞台では目立つ存在だった。東京芸術座の『蟹工船』にも客演している。なべちゃん、もっと一緒に飲みたかったよ。



「ヨーコ」 和田庸子 (佐藤庸子)

第9回川崎郷土・市民劇は和田庸子作『おーい! 煙突男よ』だった。その舞台は2,433名の観客に大好評で迎えられた。ところがその興奮も冷めやらぬ11日後の2022年5月26日、66歳の若さで急逝した。急性大動脈解離だった。あまりのことにだれもが信じられなかった。

劇団ではただ一人の大学演劇科卒。1977年に入団、45年間活躍した。『ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男』を皮切りに、『黒と白のピエタ』、『人のあかし』、『おりん一姥捨て異聞』などを書き、いずれも好評を博した。



創立50周年ではそれまで上演した劇中歌をまとめたCDを作った。また、音楽家安達元彦氏の論文集を編集し、刊行。誰もができることではない、実に大変な仕事をやってのけた。地域の社会活動や母親大会の活動など多方面でも活躍した。

今回、娘の板垣けゑてさんからの企画で『黒と白のピエタ』を和田庸子追悼公演として上演したが、初日の1か月前には予約で満席となり、追加公演をするほどだった。庸子さんも天国で「やったね」と言ってくれているにちがいない。

創造的な、そして組織的にも劇団のブレインとしての彼女を失った劇団の痛手ははかり知れない。

劇団員故人の活動の記録 (逝去年月順)					城谷護調べ
No.	芸名	本名	劇団歴	主な活動分野	逝去
1	黒沢参吉	黒川律	1959～1982年(22年間)	初代代表、劇作、全り演、川崎文化会議	1982年(65歳)
2	宮崎昌子	中澤昌子	1959～1985年(25年間)	文芸部、舞台監督、演出	1985年(53歳)
3	山口あきお	山口昭男	1973～1995年(22年間)	俳優	1995年(48歳)
4	中沢研郎	中澤研郎	1959～2003年(43年間)	俳優、演出、制作、代表委員	2003年(71歳)
5	原科清	原科清	1959～2003年(43年間)	俳優、小道具、太鼓	2003年(78歳)
6	根倉藤子	原科トヨ	1960～2009年(48年間)	俳優、小道具	2009年(68歳)
7	佐藤張二	坂原長二	1963～2013年(50年間)	舞台美術	2013年(76歳)
8	水野哲夫	水野哲夫	1959～2014年(54年間)	制作、俳優、労演、川崎文化会議	2014年(77歳)
9	堤次郎	鈴木晃	1964～2016年(52年間)	俳優、制作、太鼓	2016年(74歳)
10	室野定子	水野定子	1959～2004年(44年間)	俳優、演出	2017年(82歳)
11	渡辺高志	渡辺高志	1988～2017年(29年間)	俳優	2017年(67歳)
12	細田寿郎	細田寿郎	1959～2018年(58年間)	演出、大道具、代表委員	2018年(85歳)
13	野見山紘一	野見山紘一	1970～2000年(30年間)	照明	2018年(77歳)
14	和田庸子	佐藤庸子	1977～2022年(45年間)	劇作、演出、制作	2022年(66歳)

「文化の仲間」会報 100 号にあたって

「文化の仲間」編集部

1996年9月1日、「京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間」は発足し、9月25日には会報「文化の仲間」No.1を発行しました。あの日から28年、会報はついに100号となりました。

様々な事柄を思い起こさせてくれる紙面の連続だったと思います。会報で初めて知った人たちがいました。幾多の方々の訃報を知ることもありました。

21世紀に入り、大きな災害や、終わりの見えない殺戮、崖っぷちに立たされている地球温暖化……コロナ禍では、人と人のコミュニケーションが拒まれました。そんな中、文化の仲間は演劇を通して、文化を通して、平和な明日を切り開くために歩みを進めていき

ます。

101号、102号それに続く……「文化の仲間」をこれからも発行し続け、皆さんにお届けしたいと考えています。

会報の発行を支え、協力して下さった方々に深く感謝いたします。

なお、会報No.1からNo.50の合冊版を作ったように、今回、No.51からNo.100の合冊版を作る計画があります。皆さんのご協力をいただけるとありがたいと思います。

* * * *

訃報

安達元彦さんが亡くなりました

2024年12月3日、文化の仲間の会員で作曲家の安達元彦さんが逝去されました。84歳でした。

京浜協同劇団との出会いは1968年、28歳の若き作曲家は、以後半世紀を越す年月のあいだ劇団の創作にかかわりました。——9月に転倒により大腿骨骨折。退院して間もなく肺機能低下で再び入院、帰らぬ人となってしまいました。葬儀は近親者で12

月6日に行われました。心よりご冥福をお祈りいたします。

京浜協同劇団と文化の仲間では、近日中に“安達さんを偲ぶ集い”（仮称）を、故人の慣れ親しんだ劇団の稽古場で開きたいと検討中です。



2025年 第41回 かわさき演劇まつり

「みどりのゆび」を上演します

京浜協同劇団 柳沢 芳信

演日・日程が決まりました

今年のかわさき演劇まつりは、7月26日、27日の二日間、多摩市民館で開催いたします。

演目はモーリス・ドリュオン作「みどりのゆび」、演出は、前回に続き大西弘記さん（TOKYOハンバーグ主宰）です。

物語は……

大金持ちの商人のもとに生まれた少年チトは特別な子どもで、純真そのもの。ある時、どんなところでも花を咲かせることができる「みどりのゆび」を持っていることに気が付き、その指を使って、刑務所や、病院、貧乏な人々が暮らす街を花いっぱいにして人々の心を優しい気持ちにさせていきます。

ところが、戦争で人々が殺し合いを始めたとき、自分の父親が戦争で儲ける武器商人であることに気が付きます。

心を痛めたチトは、父親の工場に入って、全ての武器に花を咲かせて使えなくしてしまうのです。

この作品について

この作品は、フランスの作家によって書かれて

1957年に発表されました。

日本では、安東次男の訳で岩波少年文庫から刊行されており、岩波おはなしの本として1965年7月に第1刷が発売されました。

以来、「反戦童話」という評価が定着していますが、どんなことにも「なぜ？ どうして？」と問いかけるチト少年の姿は、人生の指針を与えてくれます。

現在出演者募集中

現在出演者募集中です。応募は1月31日まで。

対象は、小学生以上、2025年7月の公演に出演を希望する方。出演を迷っている方もどうぞ。申し込み方法は下記をご覧ください。



前回（第40回）「モモ」の出演者

第41回 かわさき演劇まつり

みどりのゆび

作 モーリス・ドリュオン 演出 大西弘記

日程 7月26日（土）・7月27日（日）

会場 川崎市多摩市民館ホール

出演者大募集中

申込先 かわさき演劇まつり実行委員会事務局

FAX 044-533-6694

メール：matsuri_engeki@yahoo.co.jp

公演までの流れ ①ワークショップオーディション
2月16日（日）・23日（日・祝）・24日（月・振休）

②稽古開始 4月上旬予定

③本番 7月26日（土）・27日（日）（4ステージ予定）
会場 多摩市民館ホール

お問合せ：川崎市文化財団 TEL 044-272-7366
（平日9時～17時）

川崎演劇協会 TEL 044-511-4951（非常勤）
詳しくは

[https://kawasaki.genki365.net/G0000001/
common_content2/2660.html](https://kawasaki.genki365.net/G0000001/common_content2/2660.html)



申込フォーム

◎文化の仲間通信◎

◆NPO 現代座公演 出航

日程 2025年2月1日(土)～9日(日) 詳細問合せ

会場 現代座ホール

(JR 中央線 東小金井、武蔵小金井駅徒歩13分)

作 木村快/音楽 岡田京子/演出 八木澤賢/出演 今村順二・伊藤嘉朗・杉山龍・木の下敬志ほか

料金 一般4,000円 学生3,000円(日時指定自由席) 予約制です

1980年代のこと。魚の捕れなくなった、いわば展望のない海へ船出していく遠洋漁船があった。

問合せ・申込み 現代座 TEL 042-381-5165

Eメール: gendaiza.ticket@gmail.com

◆劇団民藝公演 八月の鯨

日程 2025年2月8日(土)～17日(月)(詳細問合せ)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

作 デイヴィッド・ベリー/訳・演出 丹野郁弓/出演 日色ともゑ・檜山文枝・小杉勇二・細川ひさよ・篠田三郎

料金 (全席指定・税込み) 一般7,000円・夜チケット5,000円 [夜公演(2月12・14日)全席]・U30(30歳以下) 3,500円・高校生以下=1,100円 ほか

老境にあってもなお自分の人生を見つけようとする人々。彼らはどのように死ぬかではなく、どのように生きるかを探ろうとします。

問合せ・申込み 劇団民藝

TEL044-987-7711 (月～土 10時～18時)

HP: https://www.gekidanmingei.co.jp/

◆青年劇場創立60周年記念公演

「ホモ・ルーデンス『春雷』より」(仮題)

日程 3月15日(土)～26日(水)(詳細問合せ)

会場 青年劇場スタジオ結(ゆい)

原作 大谷直人「春雷」/作 佐藤茂紀/演出 関根信一

縄文時代、狩猟の名手で若くして長老候補のシシと、腹の足しにならない「遊び」ばかり考えだすササ。対照的な2人を描き「人間の価値とは？」を問いかける。

問合せ・申込み 青年劇場 03-3352-6922

◆劇団銅鑼公演 No.61 わたしの紅皿

日程 3月19日(水)～30日(日)(詳細問合せ)

会場 銅鑼アトリエ

(東武東上線 上板橋駅 北口徒歩10分)

作・演出 五戸真理枝/出演 谷田川さほ・館野元彦・竹内奈緒子・久保田勝彦 ほか

1954年から始まった西日本新聞の女性投稿欄「紅皿」の約10年間の投稿。

問合せ 劇団銅鑼 TEL 03-3937-1101

HP: http://www.gekidandora.com

E-mail: info@gekidandora.com

◆2024年度神奈川県演劇連盟 合同公演

Yokohama Mice ヨコハマ マイス

日程 3月21日～23日

会場 神奈川県立青少年センター紅葉坂ホール

作 中西広和/演出 中山朋文/出演 いらいざ・江花実里・大西真愛・奥川陽 ほか

時は20世紀初頭、横濱。浪漫あふれる馬車道の路地裏……。たくましく生きる美しきネズミたちが、歌って踊る、スペクタクル群像劇!

◆原発ゼロへのカウントダウン in かわさき

集会&デモ

日程 3月23日(日)12:00～

会場 中原平和公園

事前申込不要・参加費無料、初めての方歓迎

12:00 開場: 市民活動紹介ブース/福島からの避難者 鴨下美和さんトークライブ/ FoE Japan 満田夏花さんトークライブ/地震と原発を語る 北野進さんトークライブ/ほか

12:30 文化行事/ 14:00 メイン集会/ 15:30 デモ行進

連絡先 044-211-0121 (川崎合同法律事務所。三嶋共同代表)

公式サイト https://genpatsuzero.net/

◆東京芸術座アトリエ公演 No.48 『法王庁の避妊法』

日程 2025年4月19日(土)～27日(日)

会場 東京芸術座アトリエ

作 飯島早苗・鈴木裕美/演出 安田カオル/出演 荻野久作・鈴木健一朗・古井半三郎・関根学・高見詠一・脇秀平・小川拓郎 ほか

問合せ 東京芸術座 TEL 03-3997-4341

●文化の仲間世話人会からお願いとお知らせ

◇新しい年になりましたので、会費の納入をお願いします。

個人会員 3,600円、家族会員 5,000円です。

皆さんからいただいた会費は、会報の発行や劇団のサポート活動のために使われています。

◇「私のうたごえ人生」をご執筆いただきました菅野章さんは、事故後1年以上になりますが、意識が戻らず療養中です。このため、連載は中止とさせていただきます。ご了承ください。菅野さんのご回復をお祈りいたします。

◇連載していただきました『厳選』大谷敏行の川柳塾ですが、大谷さんは劇団を退団されましたので、連載は中止とさせていただきます。



絵手紙 竹間テル子